

令和2年8月19日

文責：高橋 海星

2020 北海道レフェリーアカデミー 第4回(2019/2020 第14回) 事業報告書

1. 日時:2020年8月1日(土)・2日(日)

2. 開催場所:札幌創成石狩グラウンド、石狩市民プール、札幌英藍高校、とわの森三愛高校グラウンド

3. 参加者

審判員:小松祐也(2日のみ参加)、田口平蔵、高橋海星、牧田隆史(1日のみ参加)

インストラクター:古曾部統太郎 氏、伊藤真也 氏、岡田渉 氏

4. 内容

【8月1日】

9:00:試合実践① 札幌創成高校 A vs 東海札幌高校 A R 牧田

<個人分析>

新型コロナウイルス感染症の影響で試合ができ  
おらず、この試合が今シーズンで3回目の主審であ  
った。そのため、プレースピードについていけるかどう  
かの試合勘に不安があったが、実際に試合をやっ  
てみると、そうした不安に反してスムーズに試合を進め  
ることができた。しかし、競り合いの場面での判定などで、「選手はもう少しできるだろう」という気持ちを持  
ってしまい、選手がプレーをできる・できないという点において、判定があやふやになっていた。選手  
のした行為・それによって選手がプレーをできるかをより見極めることが今後の課題であると思う。



<インス分析>

ヘディングの競り合いにおいて明確に課題があるように思う。ボールにプレーできる状態で競り合っ  
ているのか、DF側の意図はどうなのか、もっと注視する必要がある。各プレーにおいて、選手の「意図」  
を感じるために、何をみるべきか一つ一つ整理する必要がある。

10:25:試合実践② 札幌創成高校 B vs 東海札幌高校 B R 田口

<個人分析>



マネジメントにおいて、前半の飲水タイムをとるべきタイミングに  
注意したい。創成のスローインからの再開であったが、再開場所  
が東海のゴールに近く、中立した再開場所ではなかった。また、後  
半4分のフリーキックにおいて、クイックリスタートを保障しようとし  
たがゴールに近い位置だったので、一度プレーを止めてフリーキッ  
クのマネジメントをしてもよかった。動きとポジショニングに関して

は、前年から比べて動き出しがスムーズになってきた。カウンターの際には展開を先読みして動き出  
し、遅れることはなかった。しかし、中盤の展開で選手とポジションが重なってしまうことがあったので、  
選手の邪魔にならないようなポジショニングを心掛ける。

<インス分析>

後半3分の創成のホールディングに対するマネジメントは効果的だと考える。警告等に当たる状況で  
はなかったが、意図が感じ取れたのは成長の証だと考える。動きに関しては、立ち上がりから動き出し

に意識していることは伝わる内容であった。20 km/h の Sprint も前半 16 本、後半 14 分と効果的に発揮されていた。特に後半 7 分の切り替えよる Sprint は素晴らしいものであり、時速も 30 km/h を越えているものであった。後半の飲水タイム後から体力の低下からか、時計に意識が行くようになったのは今後の課題と考える。

11:50: 試合実践③ 東海札幌高校 A vs 北海道大谷室蘭高校 A R 高橋

<個人分析>

縦への動き出しのタイミングを早くし、次への争点へ遅れずに余裕をもって判定しようと試みまた。ボールの出し手のモーション、受け手の動き出しを見てタイミングよく動き出せたと思う。しかし、攻撃側チームがどこを使ってどのように攻めているのかをあまり考えずに動いてしまい、動きだけで満足してしまい肝心な判定の部分に生かすことができなかった。前半 14 分 PK シーンを正しく判定できなかった原因は、縦へ動き出すためにボールの受け手であった FW のアクションを見た後にファウルをする可能性



の高い DF をしっかり監視ができなかった。良い動き出しをするために受け手を見て動き出した後、視界に DF が入っていたことでボールの優先権が低い DF を監視しているつもりになっていた。意識して DF を見ていなかったためボールをプレーしたかどうか、接触部位はどこを使ってどこと接触したのかなどを見極めることができなかった。改善策として、動き出した後にボールをプレーする可能性が低い選手を意識して監視すること。また、ボールが浮いているかどうか、ボールの受け手が前を向いているのかどうかで監視する部位も変わることを意識していきたい。

<インス分析>

交流戦ではあったが、両チームとも一生懸命戦う試合であった。序盤は少し体が重い感じもあったが、次第に主審も展開を感じながらよく動き出し、よく走っていた。フリーキック時にボールの位置に気を配りすぎていたが、壁を先に離しておくなどの工夫ができたのではないかな。ほかのアウトオブプレー時でも先にできることをしておく必要がある。後半 29 分 FK 時のポジションは意図が分かりにくかった。前半 28 分のシーンもどちらのプレーヤーに優先権があったか、それに対してどのようなチャレンジだったか（ボールにチャレンジしたか・ボールにチャレンジしようとしたが、結果的に相手だけを妨害したのか）気を付けてほしい。

13:10: 試合振り返り・昼食・移動

14:30: フィジカル実技(リカバリートレーニング) プール実技

プールの中で歩いたり、ストレッチなどをしてリカバリートレーニングを行った。

15:40: 諸連絡・解散

【8月2日】

9:00: フィジカル講義

前日のプール実技で行ったリカバリートレーニングについての講義を行った。試合後の体にかかるストレスを減らすためにリカバリートレーニング必要である。そのストレスを管理(汎適用症候群、超回復の原理)し、ストレスの原因を処理することはコンディショニングの維持の観点からも大変重要である。

激しい運動、試合後は疲労度が一番高く1~2時間以内に行うリカバリーとしてクールダウン、睡眠、



入浴などがある。激しい運動や試合後 24～48 時間にはリカバリーが始まるためアクティブリカバリー、バイク、物理療法などを行うとよい。

#### 10:00:プラクティカルトレーニング

試合中の PK 時に反則があった時の対応、ゴール前で FW が抜け出しファウルがあった時の DOGSO か SPA の判断、中盤からサイドへパスが出た時の動き出しに関するトレーニングを行った。

いつどこで何をどのように見るかを整理していないと、何かが起こったときに準備不足になってしまい、判定ミスであったり適用ミスが起こってしまうと3つのトレーニングを通して感じた。例えば、DOGSO のシチュエーションではボールの移動中に守備側の位置と数、攻撃側の位置と数、プレーの方向などを把握して、ボールへの優先権のない選手が人やボールにどのように挑んでいるか、危険性はないかなどを良い角度と距離で監視する必要があると感じた。



#### 12:00:昼食・移動

#### 14:40:試合実践④ 帯広大谷高校 vs 札幌第一高校 R 小松

##### <自己分析>



事前の準備として初の公式戦であった為、長いスプリントをアップで行い心拍数を上げた。意識した事は動き出しで、FW を常に視野に入れた。特に不満を持つ選手もおらずゲームをコントロールできたと思う。26 分の PA 内のトリップは落ち着いて判定する事ができた。①守備側の選手が揃っている ②FW がボールをコントロールできるか曖昧 ③プレーの方向はゴールに向いている ④ゴールまでの距離は近い状況でボールにプレーしようとしてトリップをした為、ノーカードの PK という判定を下した。

オフサイドのシーンで副審とのタイミングが合わず、気付くのが遅くなってしまった。打ち合わせの時もう少し具体的な打ち合わせができるようにしたい。

##### <インス分析>

判定は一試合通して、受け入れられるものであり、後半 14 分のアドバンテージも的確であった。前半 26 分のペナルティーエリア内の事象もノーカードが妥当であり、判定自体も尊重できるものであった。前半 22 分札幌 68 が帯広 14 に対して、自ら体を入れて、その勢いで倒れたように見受け取れた。開始早々 1 分の帯広がプッシングをした場面でのマネジメントは効果的だったと考える。ファーストファウルでもあり、少々悪さが見てとれた。20 km/h 以上のスプリントが、前半 7 本、後半 9 本と試合に合った動きだったと考える。攻守のトランジションでも、切り返しは理解できるものである。ただ、ポジションとして、後半 16 分の CK 時の位置取り(ショートコーナーを感じたときのポジショニング)は課題である。後半 37 分の A2 のオフサイドのキャンセルは、キャンセルのシグナルだけでなく、ボールをキャッチした札幌の GK に声かけがあってもいいシーンであった。仮に、オフサイドとして採用し、アドバンテージを適用するのであっても、声掛けすることで、A2 にも配慮できた場面であった。

#### 16:30:諸連絡・解散